

各水試発トピックス

稚内水試、佐野主査が平成29年度 「全国水産試験場長会会長賞」を受賞!

平成29年11月7日に静岡市で開催された「平成29年度全国水産試験場長会全国大会」において、稚内水産試験場の佐野稔主査が代表を務める北海道マナマコ資源管理技術開発共同研究機関¹⁾が「北海道マナマコ資源の資源管理、生理生態に関する研究」により全国水産試験場長会会長賞を受賞しました。会長賞は「地域の水産業の発展に大きく貢献すると認められる業績」と「試験研究の成果が今後の水産試験研究の発展に寄与すると認められる業績」に対して与えられる表彰で、佐野主査は昨年の道総研理事長賞に続き、全国でもその業績が高く評価されたこととなります。

佐野主査らの研究グループは、漁業者がタッチパネル式のタブレット端末に登録した水揚げ情報とGPSによる船位置情報を、携帯回線を通じてリアルタイムにサーバーに集約し、漁業者に資源状況を迅速に提供する「マナマコ資源管理支援システム」を構築しました。また、マナマコが体重の増加に対して指数関数的に卵数を増加させることや道内各地で産卵特性が異なること等、最新の生態情報のほか、本システムを活用した資源管理の



遠藤会長から表彰状を受ける佐野主査

進め方を「北海道マナマコ資源管理ガイドライン」にまとめ、成果の広い普及に努めました。本システムを導入した留萌地区ナマコ部会では、獲り過ぎる前に操業を切り上げることが可能となったことから、それまで減少傾向だった漁獲量が3割増加するというV字回復を遂げました。

表彰式では、遠藤会長から代表者である佐野主査に表彰状が手渡されたほか、全国水産技術者協会の川口協会長から副賞が贈呈されました。表彰式に引き続いて受賞者による記念講演が行われ、佐野主査の発表には研究グループ内における役割分担について質問が寄せられ、分野の異なる研究機関が連携した先進的な取り組みに対する関心の高さが伺えました。

マナマコは中国需要に伴う近年の単価の高騰により、今や全道各地の沿岸漁業を支える重要魚種となっており、今後ますます資源管理の重要性が高まると考えられます。佐野主査らが開発した「マナマコ資源管理支援システム」は最新の情報通信技術を活用した沿岸資源の管理の先進事例として各種漁業への活用が期待されるほか、「北海道マナマコ資源管理ガイドライン」は資源管理の身近な指針として全道のマナマコ漁業者の心強い味方となるものと考えます。

(前田圭司 稚内水産試験場)

1) 北海道マナマコ資源管理技術開発共同研究機関：(地独)北海道立総合研究機構(稚内水試、釧路水試、栽培水試、中央水試)、公立はこだて未来大、東京農業大学、北海道大学フィールド科学センター、(独)水産総合研究センター*(北海道区水産研究所、増養殖研究所、西海区水産研究所)、日本事務器株式会社北海道支社 *現水産研究・教育機構

各水試発トピックス

「平成29年度水産試験研究プラザ」の開催

平成29年12月8日石狩湾漁業協同組合石狩支所で「平成29年度水産試験研究プラザ（以下「プラザ」とする）」を開催しました。当日は石狩湾漁業協同組合（以下「漁協」とする）及び北海道漁業協同組合連合会の漁業関係者や市町村役場及び北海道の水産担当職員など22名の方々に参加いただきました。プラザでは石狩湾のニシンの生態や翌1月からニシン刺し網漁が始まるのに先立って、来遊見通しなど調査研究の成果を紹介しました。

意見交換では石狩湾漁協職員の方から、ニシンは何歳まで生きるのか質問がありました。2017年2月に石狩湾漁協で「特特大」という銘柄のニシンを購入して測定したところ、その中に2006年生

まれの10歳（11年魚）のニシンがいました。2006年生まれのニシンは、近年、石狩湾でニシンが2千トン獲れるようになったきっかけの卓越年級群（加入量が極端に多い年級群）です。数が多かったのもっとよく探せばまだ生き残っているのかもしれませんが。欧米では14歳魚とか15歳魚という報告もあるので、今後、11歳魚、12歳魚と見つかってニシンが何歳まで生きるのか明らかになると思います。さらに詳しく知りたい方は「試験研究は今」No.829 (<http://www.hro.or.jp/list/fisheries/marine/att/ima829.pdf>) で報告していますので、そちらもご覧ください。このほかにもニシンが孵化までの積算水温が136℃というのとはどういうことか、ニシンが産卵する水温は決まっているのかなど活発な質疑がありました。

参加された方々に記入していただいたアンケートでは、また開催して欲しいという要望やニシンの生態についてとてもわかりやすく勉強になったなどのご意見もいただきました。今後も試験研究の成果の中から浜の皆さんが興味のある話題を、試験研究プラザを通じて直接お届けしたいと思います。

（瀧谷明朗 水産研究本部企画調整部）



本部長の挨拶（上）と発表の様子（下）

各水試発トピックス

「たかしま交流会」への参加

平成29年11月1日、一般社団法人北海道中小企業家同友会しりべし・小樽支部主催の「たかしま交流会」へ参加しました。

10月下旬に同会しりべし・小樽支部の事務局長並びに（有）伊藤商店社長が中央水産試験場を来場されました。事務局長より「会員は水産業関係者のほかホテルのシェフ、和菓子製造業や鉄鋼業など様々ですが「近年の海は以前とは異なる」と話題になっている。支部で毎年実施している『たかしま交流会』でそれに関連した講演をお願いしたい」、また、（有）伊藤商店社長からは「私はいつも相談させていただいているが、商品開発などに関する悩みを抱えていても中央水試への相談に中々踏み出せないでいる会員も多い。水試の同交流会への参加は、必ずや会員からの相談のきっかけになるものと考えている」とのお話があり、同交流会に参加することにしました。

当日は20名程の会員が出席され、志田資源管理部長より「海の話」と題して、道総研の概要、7つの水産試験場とその体制の紹介に始まり、海水温の変遷、北海道を取り囲む海流、30年ほど前から近年までの小樽市の漁獲量推移、磯焼けの原因や資源の有効利用などを講演しました。

講演後には、「最近ニシンが獲れているけれども70年程前のものとは全然違うと思っているがどうでしょうか?」、「4歳で返って来たサケが少なければ翌年の5歳になれば多く返ってくるのでしょうか?」、「磯焼けの原因は海水温上昇の他にどのようなものがあるのでしょうか?」、「磯焼けの回復のために水産試験場ではどのような取り組み

をしているのでしょうか?」など多くの質問がありました。また、ダイバーをされている会員の方からは「30年ほど前に小樽前浜に潜った際、海藻がたくさん繁藻していたけれどもカワハギが群れで泳いでいた。図鑑に載っている生息範囲よりもずっと北なので不思議に感じた」とのお話もありました。

今回は講演者の他に夏目副場長、辻加工利用部長と私（研究情報担当主査）が参加し、多くの異業種の方々から当方にとっても興味深いお話を伺うことができ、こうした機会の重要性を改めて感じました。今後も是非とのことでしたので、また参加させていただこうと思います

（池田秀樹 水産研究本部企画調整部）



講演(上)と質疑応答(下)の様子

各水試発トピックス

「北見農業試験場公開デー」に網走水産試験場が参加

北見農業試験場では、農業試験場が行っている研究や取り組みを地域の方々に広く知っていただく機会として、北見農業試験場公開デーを毎年開催しており、北見農業試験場のご厚意により網走水産試験場も参加させていただきました。

公開デーは、平成29年8月9日に訓子府町の北見農業試験場敷地内で開催されました。出展は、当社が行っている研究や取り組みの内容を紹介したパネルの展示、プランクトン標本の顕微鏡観察やホタテガイの解剖など、実際に触れてもらう体験型に重点を置いたものとしました。また、加工利用部で開発を支援したホタテガイ外套膜の加工品、「やわらかみみ」（北水試だよりNo.844）の試食や活はたて貝の浜焼きの配布などを通し、当社が行っている活動や新鮮でおいしいオホーツ

ク海産物などを幅広くPRしました。

開催当日は、準備中に雨が降り出し、天候が危ぶまれましたが、開催時間になると雨も上がり、おかげさまで大勢の来場者に網走水産試験場のブースへ足を運んでいただき、大盛況のうちに終了することが出来ました。北見農業試験場の報告によりますと、来場者数は226名で昨年より増加したとのことでした。今後もさまざまな機会を利用して、網走水産試験場のPRに努めていきたいと思っております。

開催に当たり労を執っていただきました北見農業試験場のスタッフの皆様、並びに開催趣旨にご賛同いただき、活はたて貝を提供していただきました湧別漁業協同組合様に感謝いたします。

(相内久史 網走水試総務課)



研究や取り組みの内容を紹介したパネルの展示



加工利用部で開発を支援した加工品の試食



標本による研究対象生物の説明



湧別産はたて貝浜焼きの配布